
ワームホールっていきなり言われても……

ストラップ・大守 瑛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワームホールっていきなり言われても……

【Nコード】

N1418Z

【作者名】

ストラップ・大守 瑛

【あらすじ】

オリジナル小説の処女作を多少変えてものです。

ワームホールを使ってっ敵をブツ飛ばす！

そんなことをやる、ラノベです。

登校ってこんなもんだろっ……はあー（前書き）

至らぬ点が多々ある小説ですが最後まで付き合ってください！

一様10部で構成しようかと思っております！

登校ってこんなもんだろう……はあー

プロローグ・話とは唐突なものである。

今から三ヶ月前、日本のある大学の実験室が実験中吹き飛びスタツフ三人が消えた。

そんなことは、今はどうでもいいことで「ハアハア」と僕は自転車を漕いだ。

僕、やまがみはやあ山上早雄は今、とても憂鬱気味だ。

こんなにいい天気でも、この長い距離を毎日、自転車を漕いで登下校しないといけないなんて……そんな気持ちを察してか、昨日辺り開花するはずの桜が、まだ咲かないで、赤いつぼみのまま。

まっ、そんな事でへこたれてはいけない、せつかくの進学校何だから。

自転車をさらに力強く漕ぎ進めた。

隣には、中学のころ同じ空手部のこうくうゆうた高空勇太が同じく自転車をえっちらおっちら漕いでいる。

「はあ、はあ、なんでこんなに坂道が続くんだ、もういやになってきたぞ」

考えている事は同じだったようだ。

「確かに、こんな長い道ほぼ毎日だと考えるだけで嫌になるな。選ぶ高校間違えたかな」

僕が立ち漕ぎをしても尚も、顔の位置が高い高空に向かって言った。

畜生、何でこいつこんなに背が高いんだ。僕だって平均よりは背が高いのに。

「おいおい、山上、お前がここを選んだのは、進学率が高いからだ

ろう？ 自分の将来が見えないだの言っていたのは何処のどいつだ」「将来が見えない。確かに僕が言ったこと、なんだけどさ……でもこの坂は」

「なんかの役に立つだろう」

僕の言葉を無理やり遮り、さらに続ける。

「これからの未来、如何なるか分かったもんじゃないし、明日の未来のためにも筋トレだと思え」

「ええ、筋トレ……いやだ」

さらにブルーになったのが分かったのか、すかさず高空が言う

「すまん。中学の時のあれを思い出したか。あれはトレーニングの領域を超えているから。ただの扱きだから。前言撤回、この自転車漕ぎは、お前の将来への第一歩だ！」

「うるさい、叫ぶな！」

ここで顔色が逆転するが、フォローは入れない、いつもの事だから。

まっ、そんな感じの愚痴を言っていたら、学校が見えてきた。

しりつめいかんこうがっこう
私立佼明館高等学校、これがこれから三年間通う所だ。

明館は、地方の私立にしては高いレベルの学力で、東大や早稲田などには二桁の人が行っている。

部活も盛んで、運動部は皆、インターハイにあっさりと行き、文化部は学校側が処理できないほどの賞を受賞する。かなりハイスペックな学校である。

しかし、よくこんな学校に合格できたよな、俺やつぱり頑張ったな！

「なあ、高空、昨日の新聞部の記事見たか？」

「ああ、あれには驚いた」

「この学校、まともな所だと思って入ったのに、進学率がいいのに」

「あの、生徒会スキャンダル記事には驚いた、まさか会長が」

「そっち、たしかにあったけど、そっちじゃないって」

僕が半ば強引に言葉を切る

「え、じゃあ何？」

高空は首を傾げた。

そんな変なポーズのまま校門をくぐり、生徒数と比べるとあまり広いとは言えない、駐輪所にてると、

「ああ、分かった」

やっと、分かったか。そう、あのデカデカとした文字で書いてあった、あの記事、

「生徒会じゃなくて教師の浮き」

「それでもない！」

高空に、話半分だがまた全力で突っ込む。

こいつは、どこを見ているんだ、つい叫んでしまったではないか、よく聞け、一番上に書いて、でかいタイトルで『七不思議が 十七不思議に』と、あつやつ忘れたか」

「あつあれか、俺さ先輩に昨日聞きに行った。マジで、ほとんどが春休み中に起きた実話だつて」

「ホントに。その中に巨大な動物がうろついているとか、いきなり少女が見えない穴に入って行くように消えたとか、怪談じゃないものまであつたけどそれも」

「実は昨日、先輩に聞きに行った時に。先輩の友達がマジで、人が消えるのを見た、と言っていたんだ」

「見間違いじゃないの？」

それが本当だったら怖い。ましてや、生死の境をさ迷う羽目になる様な青春、そんなことはないよな。

「それが、運動部が練習しているさなか、グラウンドの真ん中に忽然と現われて、そしてさっき言っていたように、見えない穴に入っていくように消えたつて。すごい話だ」

僕はこの時、外の部活は入らないことを心の中で固く決心した。

うん、絶対だ。

「なんか、進学校というだけで選んでしまったことに後悔したよ。将来がどうこうの、話ではなくなつたな」

「でも、ほとんどが放課後の時間帯に出ているから、運動部に入らなければ大丈夫だ」

そんなものかな？

そんな話をしていたら、あつという間に下駄箱、廊下ときて「一の五」のプラカードがぶら下がった教室に付いた。

「僕のクラスここだから」

「あつそうだ。昼休み弓道部に入った先輩に、詳しく聞いてみないか？」

「いいね。じゃあまたな、高空」

「またな」

高空は軽快に去っていき、僕はクラスのドアを小気味よい音を立てながら開けはいった。

さあこれから三年間頑張りますか！

でも、まだこの時は生死をかけた戦いをする事になるとは思ってもいなかった。

登校ってこんなもんだろっ……はあー（後書き）

最後まで読んでくださーいありがとうございますっ……

では続きをどうぞ！

今度は女の子が出てきます！

登校初日ってこんなのだっけ？（前書き）

女の子が登場！

でもこんなものありかいな！

的な展開です。

登校初日ってこんなのだっけ？

第一章、学校はこんなもんだ。

そのあと教室に入った俺は、初めは緊張して声をかけなかったが、次第に周りにいる男子に声をかけていた。

高校生になるとメアド交換という名義で友達作るようになっていた、と言うより今の自分がそんな感じだ。

そんなことをしていると、キーンコーンコーンとショートホームが始まるチャイムが鳴ると同時に、担任の先生が入って来た。結構若い女の先生。

「それでは自分の席についてください」

全員が席に着くのを確認し、

「連絡は特にないから早速だけど、自己紹介してもらいます」

なぜか高らかに宣言していた。

しかし早速すぎる。いくらなんでも、二日目で連絡がないなんてことはないだろ。六時間目に集会みたいのがあるとか、昨日言っていなかったか？

そんな疑問がクラス中から聞こえてきそうだが、先生はその空気を無視して、自己紹介の話が続ける。

「自己紹介は名前と好物を言うように。そのほか、出身校など言ってください。では、1番の人から……、だとうまらないので、最後に四十番の人からお願いします」

普通に一番の人からでいいと思うけど、ましてや高校に来ての、初めての自己紹介なのに。ちょっとおかしい。

やっぱり俺の後ろの人も同じ考えだったらしく、持っていた本バ

サと置き、ポニーテールの女子が慌てて立ち上がった。

「あ、あた、あたしは」

かみかみ、いきなりだから仕方がないか。

ポニーテールの女子は、落ち着きを取り戻すように一回息を吸い吐く、

「あたしは横岑雪見^{よこみねゆきみ}、八中出身よ。好物はポッキー、みんなよろしく」

すつ、と座る、みんながこつちを向いたまま、なんだか分からない無言。座ったまま、

「あ、次自分だな」

と言い赤面、僕も慌てて立ち上がり、

「僕は山上早雄^{やまかみはやお}です。好きなものは、チョコ系の甘い物です。皆さんよろしくお願いします」

もちろん、かちかちだ。どんな印象を受けたかは分からないが、最悪の自己紹介だな……。

僕は、周囲のいたい目線を、浴びながら座った。その時、僕の肩にとんとん、と後ろから硬いものに叩かれ。

「あの先生、面白しろいな」

振り返るとポニーテールの女子のニコニコ顔があった。

「ただのへそ曲がりの先生だよ」

「早クン、すごいナイーブだね」

初対面でなんかひどくない？ このポニーテールの女子は思ったことが口に出してしまうのか、まず否定はしておこう。

「僕はナイーブでないけど。ただ連絡とか何にもないなんて、無茶苦茶だなと思ったから。それより早クンとは、僕の事？」

「そうだよ。だめだった？」

「分かったから、そんな顔しないで。」

今にも泣きそうな顔だった。ポニーテールの女子は起伏も激しいらしい。

「そうだ、自己紹介聞かなくていいの？」

「今から、かなっこの自己紹介か、どんなことを言うか聞いてやらないと」

「友達？」

「そうだよ」

その子を見様と前を向くと、僕は右掌を掻いていることに気が付く。

またかこの癖を治したいな。

「出雲かなえ（いずもかなえ）です。八中出身で好物は雪ちゃんと違って、トツポです。あつ、雪ちゃんと言うのは、雪見ちゃんのことクネームです。私のことは、かなえちゃんと呼んでくださいです」
背は低く、ショートカットの少女がすつと座った。

「人形みたいでかわいいでしょ」

確かにリアルな人形。でも、自己紹介の中には余計なところがあったような、気のせいか？というか、何時の間いつにそんなに自己紹介進んだ？

「昔は、あんなん、じゃなかったのに」

ぼそりと、呟く。

普通に気になる事だが、聞いても言いのか。

「横岑さん、む」

彼女の人差し指が、僕の唇にあてられ言葉が遮られた。

いきなりだった、僕の顔が、自分で真っ赤になったのが分かるくらい熱くなる。

辺りを見るがみんなは、自己紹介を聞いているのか誰も気が付いてない。よかった。

「よ、横岑さん。何ですか急に」

「雪見と呼んでいいよ、あと人の過去は勝手に詮索しない、それが本人に直接聞くこと。お父さんにもよく言われたな」

さっきまで笑顔が遠い目になっていた。やはり感情の起伏が激しい

人。

「すみません、ただ気になっただけで」

僕はすうと頭を下げた。確かに彼女の言い分も正しい。

「ごめん、あたしも結構身勝手なこと言ったよね。いかにも、聞いてくださいみたいな、そんな言い方だったし」

「いいえ、機会があつたら、僕が本人に直接聞くようにする。」

雪見は笑顔に戻る。ちょうど、一番の人が自己紹介を終え着席した。

「それでは皆さん全員自己紹介終わりましたね、では」

その後担任の長い話を聞いて一時間目の授業が終わった。

で二時間目は校舎案内だそうだ。

この学校は、北からグラウンド、次に体育館などがある体育棟、次がクラスルーム棟、最後に特別棟である。

今僕らはクラス棟の一年五組の前である。

「早クン、なんだかわくわくするね」

僕の隣に左隣り並ぶ雪見が声をかけてきた。

「そうだね」

一様肯定しておく。

担任を先頭に出席番号順に二列に並んでいるため前二人は女子で、話しかけてくれるのは雪見だけだ。

僕らを並ばせると担任はすぐに説明してきた。

「まず、ここがクラス棟、教室のほかにも多目的教室が六つぐらいあります。次は体育棟に行きます」

なぜか、すごい高いテンションで先生は説明をする。

「早クン、やっぱり広いよね」

「ドーム四つ分の広さがあるから、雪見さん」

雪見がぶくと、頬を膨らます。

かわいいが、たぶん怒っているだろう。

「雪見、と呼び捨てでいいよ。後、その変に丁寧語使わなくともい

いよ。どうせ同級生なんだし」

「うん、分かった」

雪見は、頬を元の形に戻し、にっこり笑う

そして律儀に二列にまます移動し、僕らは体育棟の体育館前についた。

「この二階には体育館があります。一階は武道館があります」

担任はさつきと打って変わって淡々と説明をする。

「雪見は何か体育系の部活に入るの？」

「いや別に入らないよ。でも、何で早クンは、あたしが体育系の部活に入ると思ったの？」

「さつきから、きよろきよろしていたから」

「そうだった？　ところで、早クンは何の部活に入るつもりなの？」

「たぶん、空手部に入ると思う」

「へー、中学では空手部だったの？　あんまり聞かないけど」

「そうだよ。一樣……東北大会に出て、優勝したけど……」

「おお、強いんだね」

パチパチと、拍手してくれているが、そんなに凄い事ではない。

「いや……運が良かっただけ」

「何で？　優勝したんだから凄いよ」

凄い凄いと言われ、ダウンナーになる、僕……

「僕以外の選手が、全員棄権して優勝という悲しい落ちが、はあー、あんなのない普通。あそこまでの鍛錬の日々は何処へ、カムバック
中学の青春」

「なんか、つまらない大会だったでしょ」

「そうだね。自分の力も試したかったのに」

泣きたい……今すぐに泣きたい。

そんなことを話していたら、クラス棟を通り抜けている。と、

「早クンは、何時も右手を掻いてるよね」

雪見が話しかけてきた。またか

「治したい癖なんだけど、なかなか治らないから困ってて」

僕は右手を掻くのを、止め赤くなつた手を雪見に見せる。

苦笑いだけで他のリアクションは無いまま、何時の間にか特別棟の一階に来た。

「特別棟の一階は皆さんが知っている通り、昇降口と購買部があります。そのほかにも」

「購買部は開いてないね、早クン」

雪見は先生の話の話を聞かずに僕に話しかける。

ほかの生徒は、真面目に先生の話の話を聞てる、さすが学力が高い学校は違う。

「そうだね、どんな物売っているのかな」

シャッターが下りた購買部を見ながら言う僕。

「シャーペンとかノートかな」

「文房具！ 普通、パンとか、おにぎりとか、食べ物じゃないの！」

「いやあたしの中学校に購買部があつてね、そこでは文房具しか、売っていないやつだよ」

「へへ僕は購買部があつたのは高校から、だから何が置いてあるのか、知らないんだ」

後で、どんな物が売っているか確かめよう。そして先生の説明が終わり、僕は二階に上がる。

「この階には職員室やパソコン室、理科室などあります。次は三階に行きます」

なんだか、色々な教室がある階なのに、説明が終わると、直ぐに三階に上がった。

「三階は文芸部の部室と視聴覚室です。文芸部以外はめつたに来ません」

その、滅多に来ない三階を、隅々まで先生は案内をした。ここよりも二階を説明しろよ！

と心の中に突っ込みを入れてみると、僕はついに、ある部のプラカードを見つけた。

「あつ科学部だ」

「どうしたの、早クン」

「この学校にある、十七不思議知ってる？」

「うん、まあ」

なぜか雪見は顔逸らし、答えた。

「誰もいない筈の、科学部から声が聞こえるという、一七不思議の一つ目にあつてさ、それで気になって」

「ああ、そんなのも、有ったよね」

今度は、目を泳がしていた

「ここで何かあつたの？」

「いや別に」

僕は、それ以上詮索するのを止めた。

何か有ったぽいが、しかし言いたくない事なんだろ。

先生は、科学部から少し行った所の大きな扉の前で止まり。

「ここは、幽霊が出る視聴覚室です」

と一七不思議の一つであるお化けが出る視聴覚室を話して、チャイムが鳴ったので教室に戻った。

科学部前での雪見の反応は、なんだっただらう？怖いものが嫌いとか、でも視聴覚室のお化けの話の時は普通だったのになんだらう？

登校初日ってこんなのだっけ？（後書き）

まだ続きます。

事件も何も発生してないけど、伏線ばっかですね。
では、次をどうぞ、何か変なのに巻き込まれます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1418z/>

ワームホールっていきなり言われても.....

2011年12月5日00時53分発行